

柴犬、ハスキー、シェットランドシープドッグ、コーギー、果てはチワワにトイプードルに至るまで。僕はやたらと犬に吠えられる。余程お犬様の勘に触るような顔立ちをしているのか、変な臭いでも出しているのか。理由はわからない。

「そりゃあんた、前世からの因果だから仕方ないってmondだよ」ツネさんなら絶対に僕にそう返してくるだろう。

ツネさんとは僕が昔住んでいたアパートの大家さんのことだ。

僕の家は母子家庭だった。母の学生時代の恩師のツテで紹介してもらった小さなアパート。僕の幼少時代の記憶の全てはそこで刻まれている。

母が家にいることは少なかった。そんな僕の遊び相手になってくれたのがツネさんだった。ツネさんはアパートの一階に旦那さんと二人で住んでいた。旦那さんは著名な洋画家で、普段は離れを改装したアトリエに籠っているか、庭木の手入れをしているかといったような温和な人だった。

ツネさんはそれとは対照的だった。還暦をとうに過ぎていとは思えないような破天荒さで、合鍵で勝手に僕の所にやってきては、散歩だといって10km近く離れた町まで一緒に歩かされたり、ご飯をご馳走するといっちは目の前に食べきれない量の大皿料理を幾つも並べられたり。

僕は決して活発な子供ではなかった。だから散歩の途中で疲れたと言って一人で帰ったり、ご飯だって食べられないといって残したりもした。

「散歩の途中で逃げ出したり、出されたもの残したり……まったくアンタはさくらと一緒にだね。」

「よし、あんたは今日からさくらだよ。」

「さくらはひょっとしたらさくらの生まれ変わりかもしれないね。いや、さくらの方が幾分利口だったね。」

アパートで暮らすようになって一ヶ月もしないうちに僕はツネさんから“さくら”と呼ばれるようになった。

さくらとはツネさん夫婦が飼っていた犬の名前らしい。臆病で意気地がなくてワガママで。クゥ〜ンと鳴くばかりで吠えることもなくて、むしろ近所の犬から吠えられてしょげてかえってしまったり、それどころか猫、カラス、雀にまで喧嘩で負けてしまうような……そんな犬だったらしい。それだけ聞くとなんとも不名誉な名前に感じられるが、でも決してツネさんは僕のことを卑下してそう呼んでたワケではなかった。それは子供の僕にだってちゃんと分かった。

アパートの裏庭には何重もの囲いに囲われて小さな桜の苗木が植えられていた。この木は

3年前。犬のさくらが亡くなった時にその亡き骸と一緒に旦那さんが植えたものだそうだ。「せめて名前負けしないように綺麗な桜くらい咲かして欲しいもんだね、あたしらがくたばる前に、早くね」春先になるとツネさんは皮肉っぽくそんなことを言いながら、墓塵を敷いて苗木の前で咲いてもいない桜で花見をしていた。もちろん僕も一緒に。その隣では旦那さんがその桜の木をスケッチしていた。毎年毎年。それがこのアパートでの恒例の行事だった。

中学生になり母とアパートを出ることになった最後の春。僕は旦那さんに尋ねてみた。どうして毎年あの桜の木の前で花見をするのか。

「昨日より今日、今日より明日がいい日になる。それを忘れたくないんだよ」たくわえた髭の下からつぶやくように旦那さんは答えてくれた。

「私たち夫婦には子供が出来なかった。だからさくら……犬の方のね、が子供みたいなものだった。人間ね、折り返しを過ぎてくると変わりたいのに変わってくる。明日が暗くみえてしまうんだ。でもさくらがいるだけで変わった。弱虫のさくらがちょっとづつ大人になっていく。鳴いてるだけだったのがいっちょまえに唸ったりするようになる。でもすぐに鳴き始めるんだけどね。でも、そういう成長があるから。だから明日が楽しみだった。」旦那さんは台所で僕らに持たせる為の物凄い量の弁当を作るツネさんをニコニコ見つめながら続けてた。

「さくらが亡くなってそれが失われないように……こうやって桜の樹を植えたんだ。毎年の成長を見続けたい。あの樹は……さくらは今でも私達を支えてくれているんだ。」

ワンワンワンワン！！

今日になって8回目だ。2浪してようやく合格した地方の美大のキャンパス。その桜の樹の下でうとうととしていた僕を起こしたのはまたもや犬の鳴き声……それも携帯電話越しでだった。

電話は母からだった。その奥で最近母が飼い出した豆柴のコタロウの鳴き声がしきりに聞こえる。母は慌てた様子でこう告げた。

「ツネさんが病院を抜け出した」

アパートを離れてからもツネさん達との交流はあった。身寄りのない二人は僕らを本当の親戚のように思ってくれたのかもしれない。年に1度はあのアパートにだって行っていた。ツネさんも旦那さんも変わらず元気だった。半年前までは。

半年前。旦那さんが亡くなった。突然の出来事だった。お葬式で会ったツネさんはまるで別人のように静かで寂しい表情をしていた。病気とは無縁だったのに、ツネさんはそれから半月もしないうちに内蔵疾患で入院してしまった。僕も何度となくお見舞いにいった。

「なんだ、またさくらか。ちっとは飯食えるようになったか？」

あの時みたいに皮肉をいうツネさんの言葉に覇気はなく。僕はどう答えていいのか分から

なくなった。

「病院の近くで行きそうな場所は探してるんだけど……アンタ心当たりない？」

困惑する僕の目を覚まさせるように春にしては冷たい風が吹きつけてきた。それと同時に無数の桜の花びらが舞う。

「さくら……」

母の車に揺られて僕らはあのアパートに着いた。車中でずっと吠え続けていたコタロウもようやく僕のことを無害だと認めてくれたらしく今は僕の膝の上でおとなしくしている。

やっぱり……ツネさんはそこにいた。

満開に咲く桜の樹の下で墓蓋を敷いてツネさんが小さく座っている。

「ツネさん……」

そう声をかけようとした矢先、コタロウが物凄い勢いで吠えながら桜の樹に駆け寄っていった。それに気付き振り返るツネさん。僕らに気がつくくと手招きしながら大皿いっぱいに乗ったおにぎりを差し出してみせた。

僕は鞆からスケッチブックを取り出すと、母と一緒にツネさんの元に歩み寄った。

コタロウはまだ飽きずに桜の樹に吠え続けている。

【終】

※2009/01/24-25 C2-Reading vol.02 『ハル』にて九鳥無音名義にて発表・公演

※ご利用上の注意※

- ・本作はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・本作をご利用頂く際は必ず作者（gumba1227@hotmail.com）までご一報頂けますようお願い致します。
- ・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・仲間内で集まっての練習でのご利用。
- ・Skypeなどを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・各種配信サービスによる配信・生配信など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をご記載いただけますようお願い

願ひ致します。

その他ご不明な点ございましたらお気兼ねなく下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)